

新春スペシャルインタビュー

シテ方観世流能楽師

長山 耕三

松ノ内町の一画にある「芦屋能舞台」。一見すると普通の住宅のように見える建物の中に足を踏み入れると、光り輝く檜作りの能舞台が広がります。身体の奥底に届くような伸びのある長山耕三さんの声音が、この能舞台に響き渡ります。平成29年に観世流能楽師として重要無形文化財総合指定保持者の認定を受け、現在は東西の舞台で活躍中。また「能楽子ども教室」を開催するなど普及活動にも積極的に取り組んでいます。昨年の11月にルナ・ホールで21回目を迎えた「芦屋能・狂言鑑賞の会」を成功させた長山さんへ能に関するいろいろなお話しをお伺いしました。

一期一会

第21回「芦屋能・狂言鑑賞の会」では、おかげさまで全席が完売し、多くのお客様の前で演目「国栖」に挑むことができました。この演目は、王位継承争いで窮地に陥った若き帝が、老夫婦の助けにより王位を継承できる縁起の良いお話です。昨年から続く新型コロナウイルス感染症の影響で、世の中は何となく暗い雰囲気が漂っています。しかし、皆さんは色々な対策や努力をしながら、この難局を乗り切ろうと頑張っている。この状況が「国栖」のお話と重なるところがあると感じ、お客様に少しでも元気を届けたいと思い、この演目を選びました。これまで当たり前のように開催していた公演ですが、ひとたび新型コロナウイルス感染症がまん延すれば、また開催できなくなるかもしれない。ですから開催できることに感謝し、一期一会の気持ちで一番一番を今まで以上に丁寧に演じていきたいと思っています。

能楽師のはじまり

およそ120年前、曾祖父の長山青峰から能楽(観世流)の道が始まり、私で4代目にな



ります。観世流能楽師・長山禮三郎(芦屋市民文化賞受賞)の長男として生まれた私は当然のごとく能楽の道に進みました。記憶は定かではありませんが3歳ごろから稽古は始まっていたと思います。4歳の時に仕舞(能の演目のクライマックス部分)で初舞台を踏んだ映像が残っています。稽古中の父は怖かった。今でも怒鳴られた稽古中の記憶が強烈に残っています。幼少の子に怒鳴ってまで何を必死に伝えたかったのだろうと、今になって考えてみますと、私も父親として子どもに能を教える立場になって、分かってきましたが“お行儀”や“様式(決められたやり方・動き方・姿勢を守ることで生まれる美しさ)”を教えたかったのでしょう。すぐには出来なくても、少しずつ体へ叩き込んでいこうと考えていたのだと思います。幼少時の父の稽古がはじまりで、今の私は能楽師の道を歩めているのですから、父に感謝していますよ。

東京へ修行

私が高校を卒業する頃、父は「大学なんか行かずに、早く能の修行に入りなさい」と言っていたのですが、大学への憧れがあり進学しました。しかし、大学へ入学してから少しずつ地謡(能で謡曲の地の部分を複数人で謡うコーラスのようなもの)などの仕事が入るようになり、私の中で能に対する想いが大きくなっていったのでしょう。大学での勉強があまり意味の無いものに思えてきたので、21歳になった時に大学を辞めて、能の修行のため観世喜之家のある東京へ行きました。内弟子は私も含めて6人いました。師匠が絶対的な存在のもと、それぞれの部屋もな



国栖 © 井上雅晴(芦屋写真協会)

く、大のおとなが6人も寝食を共にしながら能の稽古に明け暮れていました。今では内弟子時代と同じ釜の飯を食った仲間として良い交流が続いていますが、当時はみんな逃げ場もなく殺伐としていましたよ(笑)。

もうひとりの師匠

修行期間中に観世喜之師からは「能楽を体感して身体に貯金してってください。この貯金は盗まれませんから」と言われました。修行では“舞い”や“謡い”など全てにおいて、学校とは違い一つ一つを丁寧に教えてはもらえません。「私の立ち居振る舞いを観て盗みなさい」という師匠の教えでした。ですから、どこが大切なポイントか自分で気付き覚えていかないとはいけません。出来なければ、「何で観ていないのだ!」と怒ら